

生命の三分の一

北基行 記

一人の生命は究竟どれだけの意義を持つか、これは如何なる標準で衡量できるか。一つの絶対的な標準を出すことは大変困難である。けれども、大体その人の生命に対する態度が厳肅真摯か否かを看て、その人間の労働、仕事等の態度が如何か看ると、この人間に対する存在意義に対し、適当なる価値判断を下すことは難しいことではない。

成功を納めた人は古来より全て、自己の生命に大変厳肅に相對し、一日生きると、出来るだけ多く労働し、多く仕事をし、多く学び、無駄に日月を過ごすことなく、やすやすと時間を浪費し尽くさなかった。我が国歴代の労働人民及び大政治家、大思想家等は全て此のようでない人は居なかった。班固が書いた『漢書』『食貨志』に以下の記載がある：“冬、民既に入る；婦人同巷、相従いて夜績す、女工一月に四十五日を得る。”この数句を読むと甚だ奇異である。何故ひと月に四十五日あるのか。再度、原文の次に有る顔師古の注釈を見ると、彼はこのように云っている：“一月の中、夜半十五日を得、共に四十五日なり。”これで大変明らかである。原来、我が国の古人は西方各国の人よりも早く、科学的、合理的に労働日を計算することを知っていた。しかも、我々の古人は老若すべてが日直、夜直の計算方法を知っていた。



班固 (はんこ)
32年(建武8年) - 92年(永元4年)
中国後漢初期の歴史家・文学者。

一か月は本来三十日ある。古人は毎日の夜の時間を半日と数えて、十五日を増やしていた。この意義上から云うと、夜の時間は實際上、生命の三分の一に相当しないか？三分の一の生命に対して、歴代の労働人民はこのように重視し、しかも多くの政治家が十分重視していた。班固は『漢書』『刑法志』で尚書

いている。“秦始皇、文墨躬操し、昼獄を断じ、夜書を理す。”或る人は秦始皇帝と聞いただけで喜ばないが、その実秦始皇帝は畢竟、中国歴史上の一人の偉大な人物であり、班固は彼にたいしてそれなりの公平な評価を下している。ここで書かれているのは、秦始皇帝が夜間に書を読み学習していた状況である。

劉向の『説苑』の記載するところによると、春秋戦国時に多くの国君がみな学習に意を払ったとある。例えば：“晋の平公、師曠に問いて曰く：吾、年七十、学ばんと欲すれど已に暮るるを恐る。師曠曰く：何ぞ燭を炳せんや？”ここで、師曠が七十歳の晋平公に灯を点して夜読み、懸命に時間と争い、三分の一の生命を勝ち取り継続浪費に至らぬよう勧めた。この種類の精神は何と貴いことか。

『北史』『呂思礼傳』はこの北周の大政治家生平の勸学状況を記載している：“務は軍国を兼ねると雖も、手は卷を积(はな)さず。昼、政事を理して、夜即ち書を読む、蒼頭をして燭を執たせ、燭の燼、夜に数升有り。”燭の灰のみでも一夜に数升の多く出ること、彼が夜如何に奮闘したかが分かる。このような例はまだある。

古人はなぜ夜間の時間をこのように重視し、軽率に扱わなかったか。それは、彼らが自己の生命の三分の一に対して厳肅真摯な態度で臨んだからと、私は思う。此れは當に我々が学ぶべき点である。

夜間の時間を利用しようと、私が読者にこのような話をする、その目的は、皆様が三分の一の命に対し愛惜の念を払うことを喚起し、皆様が一日の労働、仕事を終えて、軽い気持ちで古今の有益な知識に触れてほしいと願うに過ぎない。



秦の始皇帝像 西安市兵马俑館前
(紀元前 259年 2月 - 紀元前 210年 9月)
中国の初代皇帝 (在位：紀元前 221年 - 紀元前 210年)

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「生命的三分之一」ひとそえ

第1集の第一篇です。その後の篇に比べるとやや短い文章です。一日の内に夜の時間は三分の一もあり、一生の三分の一にも当たることになるので、その時間を惜しんで活動や学習すべきだとしています。文中早くも班固『漢書・食貨志/刑法志』・劉向『説苑』・『北史』という古書からの引用が連なり、古くから様々な人が灯火に親しんだとしています。近くは温家宝が寝る間を惜しんで首相職執務をしたことが知られています。彼はたぶん周恩来を宰相としての模範にしたと思われるが、周恩来は昼間も謹直果断に執務を遂行した点が異なります。本文は一読して特段の斬新さに乏しい正論を述べているように思えます。しかし1960年代初頭の大躍進政策の蹉跌、そして飢餓危機の渦中において、摂取カロリーにも電力供給にも恵まれない工農兵大衆には届き難い知識偏重の言葉だったかも知れません。

井上邦久

「生命的三分之一」原文

一个人的生命究竟有多大意义，这有什么标准可以衡量吗？提出一个绝对的标准当然很困难；但是，大体上看一个人对待生命的态度是否严肃认真，看他对待劳动、工作等等的态度如何，也就不难对这个人的存在意义做出适当的估计了。

古来一切有成就的人，都很严肃地对待自己的生命，当他活着一天，总要尽量多劳动、多工作、多学习，不肯虚度年华，不过时间白白地浪费掉。我国历的劳动人民以及大政治家、大思想家等等都莫不如此。

班固写的《汉书》《食货志》上有下面的记载：“冬，民既入；妇人同巷，相从夜绩，女工一月得四十五日。”这几句读起来很奇怪，怎么一月能有四十五天呢？再看原文底下颜师古做了注解，他说：“一月之中，又得夜半为十五日，共四十五日。”这就很清楚了。原来我国的古人不但比西方各国的人更早地懂得科学地、合理地计算劳动日；而且我们的古人老早就知道对于日夜夜班的计算方法。

一个月本来只有三十天，古人把每个夜晚的时间算做半日，就多了十五天。从这个意义上说来，夜晚的时间实际上不就等于生命的三分之一吗？对于这三分之一的生命，不但历代的劳动人民如此重视，而且有许多大政治家也十分重视。班固在《汉书》《刑法志》里还写道：“秦始皇躬操文墨，昼断狱，夜理书。”有的人一听说秦始皇就不喜欢他，其实秦始皇毕竟是中国历史上的一个伟大人物，班固对他也还有一些公平的评价。这里写的是秦始皇在夜间看书学习的情形。据刘向的《说苑》所载，春秋战国时有许多国君都很注意学习。如：“晋平公问于师曠曰：吾年七十，欲学恐已暮矣。师曠曰：何不炳烛乎？”在这里，师曠劝七十岁的晋平公点灯夜读，拼命抢时间，争取这三分之一的生命不至于继续浪费，这种精神多么可贵啊！《北史》《吕思礼传》记述这个北周大政治家生平勤学的情形是：“虽务兼军国，而手不释卷。昼理政事夜政事，夜即读书，令苍头执烛，烛烬夜有数升。”光景烛灭一夜就有几升之多，可见他夜读何等勤奋了。象这样的例子还有很多。为什么古人对于夜晚的时间都这样重视，不肯轻轻放过呢？我认为这就是他们对待自己的生命的三分之一的严肃认真态度，这正是我们所应该学习的。

我之所以想利用夜晚的时间，向读者同志们做这样的谈话，目的也不过是要引起大家注意珍惜这三分之一的生命，使大家在整天的劳动、工作以后，以轻松的心情，领略一些古今有用的知识而已。